

「iPS細胞由来ドパミン神経前駆細胞を用いた パーキンソン病治療に関する医師主導治験」の進捗について（経過報告）

1. 概要

京都大学医学部附属病院では、2018年8月より、「iPS細胞由来ドパミン神経前駆細胞^{注1}を用いたパーキンソン病治療に関する医師主導治験」を開始しております。本治験の現在の進捗状況についてご報告いたします。本治験で得られるデータの正確性と信頼性を保つために、経過中の詳細情報は差し控えさせていただきます。何卒ご了承ください。

2. 登録状況

本治験は、予定された症例登録を完了いたしました。
新たな募集はありません。
治験参加にご協力いただきありがとうございました。

3. 細胞移植の実施状況

2021年は予定されていた合計7名の患者さんへの細胞移植を完了しました。2023年末をもって細胞移植後の検査や観察も無事終了しました。長い間、治験にご協力いただきありがとうございました。

4. 今後の展開

2024年はデータ固定後に統計解析を行って治験結果をまとめたあと、論文等にて公表を予定しております。今後とも温かいご支援をよろしくお願いいたします。

5. 用語解説

注1) ドパミン神経前駆細胞

ドパミンは神経伝達物質の一つです。パーキンソン病は、ドパミンを産生する神経細胞が進行性に失われ脳内のドパミン量が減少することにより発症します。ドパミン神経前駆細胞とは、後にドパミンを産生するようになる若い神経細胞です。パーキンソン病モデル動物を用いた研究から、ドパミン神経前駆細胞を脳内に移植するとこの細胞がドパミンを産生するようになり、神経症状を改善する効果が明らかになっています。